

て成立致しませぬから法律上全然無効たるは勿論
其意思に出でたりし時と雖單に豫約に止る時は法
律上双方の身分に關して何等の効果を生じませ
ぬ、従つて万一違約することなどがありましても
法律上少しも制裁する所は御座りませぬ。

鹽津みやげ(その四)

和歌子

●英夫(四年二月)は随分何をでも言ふ事ができ
るけれども、片言が多くて舌が廻らぬ。ワを皆ア
と言ふので、和歌山をアカヤマ笑うて居るをアロ
タルなど言ふ。ダ行が皆ラ行に發音するので「ミ
ルヲタクサンクンレキテミルレツポーレアソビマ
シヨ一三三四チュツ〜チュ」(水を澤山汲んで
來て水鐵砲で遊びませう)など、大聲で歌ふ。此

歌の外に鳥はカー〜と凧笛一聲が得意なので、
興に乗じて廻らぬ舌で歌ふ處頗る愛嬌がある。
吾切雀の語も得意なので清子(七年九月)や千代
子(六年二月)に向ては瀕に話すのであるが、大
人が行くと止める。其話の中で、私は老人ですか
ら、といふ處を、アタサトツソリヤサカイニ、と
云ふのがお定まりで、之が家人一同の笑の種であ
る。凡て拗音も正しく發音する事ができぬ。
●八月のある日、清子千代子英夫に近所の絹チャ
ンをいれて、をばさん諸共五人づれで小山のあな
たの小川に遊びに行く。堤の草原の上にとひし
て唱歌をする、御菓子を食べる。今に川の水の中
に入りたいと言ひ出すであらうとをばさんが思つ
て居ると、果して清子が第一着に小川を見返りな
がら「ハイリタイヨ」と許を乞ふ。「ハイリタイ人

はハイツテモヨロシ」と言ふや否四兒共殆ど同時に飛び込む。深さ二三寸に清らかな水がチヨロチヨロと流れ其處此處に水なき砂地がある。まるで子供のため川のやうで其喜其満足は形容のしかたがない。各自衣服を端折り筒袖を肩までたくり上げて、池を掘るやら川の中に又川を流すやら魚を生けて置く處を作るやら、木の葉を浮べて鯛や鯉にするやら泳いで居る正眞のメタカを捕へようとはね廻るやら、少時歸るを忘れて居つたが正午に近づいたので足を洗つて歸途に向ひ、又たんぼ道をつたい小山を越えて歸宅した。

●又八月の或る日、けんはおばさんの誕生日といふので其御祝紀念の小遠足をする事になりおばさん、清子、千代子、英夫の四人は菓子を提げて山一つあなたの濱にと志しました。山道で「皆デチ

ガツタ花ライロくアツメマシヨ」とのをばさんの發起に三兒は躍起となりて採集する。とうとう小さい眼と手で集められた草花が山の頂上に着いた時には二十餘種で各の手に溢ればかり。さて山も見ゆるべく海も見下すべく遙かあなたは我家も見ゆる此山の上にとゐして草花を中央に菓子を食べる。其時の兒等の喜は實に非常なものであつた、少時して下山の途につき細い山道をたどり遂に志す濱邊に達した。其處には大分永くつかはぬらしい古い小舟がたつた一艘ツクネンと砂原に捨てられてある。前には穏かな浪がうちよせて、後の方は山ばかり、人といふものは小さい三人とをばさんとばかり、山と海と吾等と舟と天地は只之だけなので、其静かな事は何とも言はれぬやがて砂遊びがばじまる。海水に浴する。貝を拾

ふ。をばさんが骨を折つて海膽を生捕りにして、子供等が其針の多いのに驚く。かの小舟の中で菓子を食べる。晝をかく。歌をうたふ。海水のいかにも青く見へるのをたへる。沖ゆく帆かけ舟の敷をかぞへる。實に三兒の活氣は此靜かな自然の中でをどり立つて居る。正午に近くなつたので程近き岩の上に釣しに來た漁夫に頼み其舟に乗せて貫つて海路家に向ふ。舟に乗つてから淺い處では岩にくつついて居る無數の海膽を見付けて大さわぎ。深い處では何も見えぬので只片手をのばして水に入れて居る。手は水を切つて舟と共にスーッと行く。「エーアンバイヤ」と氣樂なもの！世の浪風を知らぬ小さい三人と、をばさんと、皺だらけの眞黒な漁夫と一葉の舟に棹さして、大海原の陸近き浪靜かなあたりを行く様、誠に詩的で一幅の

好畫題ではあるまいかなど、をばさんは思つて居るが、三兒は海は只廣々とした愉快な處舟は動くから面白くものとして喜んで居るのである。さて正午歸宅して食卓に向ひ、今日お祝の赤飯を前にわれ一と三兒が此遠足の物語り。

○又八月のある日、千代子や英夫の阿父さんは、小舟を一艘購はれた。英夫の曰く「アノ舟阿父サントアタシトナカマニスンノヤ」と、さて此舟に名を命ずる事になり、英夫の將來の榮を祈る心で英榮とは、とのをばさんの發議に、かけ聲の様でおもしろいといふ一同の賛成に由つて、即日此舟を英榮號と命名した。

○八月の末のある夕、明朝は御祖母さんをもをばさんも清子文字も、一月あまり住み馴れた此地を去るといふので、御名残りに大人二人子供三人で、

かの英榮號に乗つて岸近き海に出た。沖のわなたに漁り火遠く、近き山々は静に立ち、月は山の端を今しも上る。様々の唱歌をのせて舟は浪のまにまに漂うて見たり、漕ぎ廻つて見たりする。此邊の漁夫が常に舟を進むる時にするかけ聲をまねてヤツチンヨ〜ヤツチン〜ヤツチンヨと大小五人が調子に乗つてかけ聲する。忽ち清子が八千代に連想して「キミガーヨーハ」とうたひ出した。即ち一同正座して沖に面して謹でうたつた。月夜、海上、小舟中の小さい人の聖代の頌、遠近の山にいかにかひいたか。

禁煙のすゝめ

東 基 吉

本誌の讀者は悉くは婦人でないのみならず、本

誌は家庭で多く讀まるゝことであるから、余はこゝに、喫煙を嗜むるゝ男子諸君に向つて、禁煙のおすゝめをし、はたかゝる人を夫に持たれたる夫人に向つて、このすゝめを其良人にせられんことを望むのである。而して、余は十五年以來の喫煙の習慣を、昨年八月三十日を以て、全く廢した事を述べて置く。

喫煙の害は既に言ふに及ばない。殊に少年に於て此害の甚しい事は、既に我が國に於ても、法律を以て禁止したのである。一般人間の心身に及ぼす危害を數へて見ると、第一、齒を弱くし、肢體を乾燥ならしめ、顔色を蒼白ならしめ、次に記憶力を減じ、眼力を弱くし、胸部、頭腦に血液を上騰させ、従つて頭痛を惹起し又咳嗽を催させるなどいふ事である。これは單に、喫煙者一個人に